

A Rose Pandemonium

青年は確かに空にいた。二十一歳、大学三年生。両親が幼少期に他界した後、親戚に引き取られた。親戚一家と良好な関係を築く一方、彼はバイトや学業で己を研鑽し、高校卒業一年間を大学費稼ぎに充当し勉学に励んだ。有名国立大学に入学してからも彼は努力し続けた。

アスファルトの森林に囲まれた大都市。彼は大学校舎の窓を開け、給水塔用の平地に足を踏み入れ、ぼんやりと空を眺めていた。校舎の一番高い屋上ではなく、何故中途半端に高い此处に立っているのか。それは彼自身でも分からない。

分かる事は眼前に広がる曇天と灰色の建物に薄暗い沢山の窓。感じるのは生温く、別に気持ちいいとは思えない少し強めの風。湿気混じりの風はこれからの天気を予報していた。それでも彼はぼんやりと立ったまま眺め続ける。彼は一步、空に向かった。何かに誘われるままにまた一步。そして彼は空を歩いた。

風が冷たく感じた。頭の中は妙にすっきりしていて気持ち良かった。この一瞬を感じる為に、彼は行動したのか。それは彼自身にも分からない。

次第に重力に引かれていく。身体が動かぬまま、ゆっくりと確実に大地に迫っていた。風が寒くなってきた。意識は風の音を聴きながら次第に遠退いていく。感じる心、身体の主導権が失われていく中で、彼は寂寥感を覚える事無く一つの事を閃く。

——地面には汚らわしい一輪の花が咲くだろう。

その想いはどのようにして生まれたのか。不安、後悔、安堵、どれもなかった。あるのはがらんとした器。その器は静かに壊れていった。

——
とくへ。

——
とくへ、
とくへ。

彼は混乱した。何故彼は混乱する事ができるのか。

重力に引かれたまま取り戻す事の無いと思っていた彼の構成要素が主導権と共に襲ってくる。痛みはない。生まれ変わったという実感もない。

あったのは彼の心と真つ暗な視界。彼は乱れた思考のままに身体を動かしてみる。まず動いたのは足。横に動いた彼の足は壁に当たる。次に手、そして頭。持ち上げる気力が戻るのを待たずに横に動かしてみるが、ゴンという鈍い音と少しの痛みを感じるだけだった。

彼は入れ物の中で仰向けになっているようだ、ようやく分かった。持ち上げる気力が戻らないのも、それは重力があるからだ。試しに彼は天井を叩いてみる。鈍い音が短く響く。彼は腕を目いっぱい伸ばすように力を加える。するとどうだろうか、何やら赤い光が見えた。

彼の推測通り、閉じ込められていたようだ。急に入れ物の中に広がった赤い光が眩しく、自ら閉ざしてしまう。恐る恐る目を光に馴染ませながら身体に力を加えていく。片肘をつき、腹筋の力で起こして立ちあがり、蓋を地面に落とす。

——ガサツ。

その蓋はただの黒い板だった。何の装飾もされていないが故に完璧な存在を放っている高級そうな板は、赤い花卉の上に落ちていた。

彼がいたのは赤い薔薇園だった。遠くに見える鉄柵まで薔薇は一带に茂っており、出口だと思われる鉄扉は開いたままだった。次に気になったのは空の色。これまた赤みに染まった夜で、赤い月が煌々と照らしている。薔薇と空の境界線には淡い赤色に染まった花を咲かす樹木が伸びている。

とにかく異様な光景であった。極めつけは鉄扉とは正反対にある赤い洋風の館だった。赤レンガに暗めの赤の塗装。全てが赤いはずなのに、同じ赤ではなくそれぞれが違う赤。

夢ではないと思わせるような生理的不快感を催す赤尽くしの風景の中、彼は二つの出口り口を——庭の出口と館の入口を見つけた。どちらも扉が開いていた。彼はおもむろに一歩踏み出す。

薔薇の海に足を踏み入れると、ジーンズに薔薇の棘が引っ掛かり、身動きがうまく取れない。手で棘を外そうとすると逆に傷つけられ、新たな赤色が彼の中から流れ出す。

彼は動きを止め、血の流れゆく様を見る。人差し指付け根の手の甲から流れる血は、指先を伝って棘を赤く染めていく。血はじんわりと鈍く広がっていく。

養分が失われていくような錯覚を覚えた彼は血を舐めた。おいしくない鉄の味。しかし鈍っていた味覚が刺激されると、嗅覚が思い出したかのように情報を送る。薔薇の甘い匂いを嗅覚は当初柔らかい匂いと感じていたが、一面に広がる薔薇の匂いは臭みを増していき、嘔吐感まで催すほどに膨れ上がった。吐き気に逆らえずに口を抑えた時、

「咲いた、咲いた。愉快な色が並んだ、並んだ。花、空、その血。どの色見ても綺麗だな」

聴覚が働いた。それは少女の声だった。退屈そうに紡がれる歌声は彼が目を上げた先から届けられていた。

牛乳と蜂蜜を混ぜたような柔らかな肌に浮かぶのは整った少女の顔。アーモンド形の眼にすつきりとした鼻梁、桃色に染まる唇。将来は確実に美人になるだろうと思わせるぐらいの美少女がシックな赤の椅子に座っていた。

その美少女も例外なく赤色の服を着ていた。ゴスロリを思わせるようなドレスに、着物のように大きく描かれた赤い薔薇のワンポイント。キュートな赤いハイヒールに赤い宝石をあしらったペンダントや指輪。蝶を模した赤いヘッドドレスに彩られたのはストロベリー・ブロード——赤みを帯びた金の髪。毛先をカールさせたその髪は彼女の手先の宝石まで届くぐらいの長い髪。

彼は赤尽くしの世界から逃れるべく、彼女の顔だけをじつくりと見つめる。彼女の黒目と黒髪、肌の色を渴望してしまうほどにこの世界は赤かったのだ。

見つめられた彼女は猫のように目を細め、そして妖艶な笑みを浮かべる。小学生低学年ほどの幼いからだつきに不相応なその艶やかさは、どこか背德的で鼓動が否応にも早くなる。

「ここはどこなんだ……地獄なのか？」

「地獄に花なんて咲いていると思う？——ここは私の庭だから。夢も風情もない地獄と一緒ににしないでくれる？」

ようやくと紡がれた彼の声は酷くしわがれていたが、彼女の声は流暢に紡がれた高いソプラノ声。その声は高飛車に接しながらも、

「綺麗な薔薇園に赤い夜。熱烈に歓迎しているのだけれど気に入ってくれたかしら」

主として彼を迎え入れていた。当の本人は未だ状況を理解できていない。

彼はあの時に咲いたはずだった。醜く歪な花を産み落とし、この地獄に來たと考えた。悪夢みたいな薔薇園を地獄と判断するこの思考回路は、可笑しな話ではあるが正しいよう

に彼は思った。

足に傷ができるのも気にせずに彼は逃げるように出口の門へと向かう。丈夫なジーンズと靴の隙間から赤い血が滲んでいくが、彼にとってはこの場からどうにかして立ち去る事が先決だった。

「そっちは入口専用なの。ごめんなさいね、開きっぱなしにして」

彼の希望虚しく、鉄柵はひとりでに閉じていく。残り数メートルの所まで歩いた彼は、その距離を縮める事無く諦めた。腫れる足を慎重に動かして彼女と対面する。彼が閉じ込められていた黒い箱は棺のような形であり、やはり死後の世界なのだろうと彼は思った。

彼は彼女から目を逸らし、辺りを注意深く観察している。すると、

「あれは桜よ。見事な赤色でしょう？ 桜の木の下には死体が埋まっているから赤いって聞いたから、いっぱい吸わせたの。桜の後ろには竜血樹りゅうけつじゆが植えてあって、こんな綺麗なドラゴン・ブラッドが出てくるのよ」

勘違いした彼女は外の樹木を指さして、その次に指輪を見せびらかす。彼女との距離は離れていたが、赤色だって事は理解できた。

「まあ近くにおいでなさいな」

彼は恐怖に震える身体を抑え込んで彼女の傍まで歩きはじめた。棺の所までは彼が踏み躪った薔薇の道があるので、新たな傷が増える事はなかった。もし彼女の提案を断っていたら、桜の木の下に埋められて誰にも見つからないまま死んでいくのだろうと容易に予想できた。

棺の横を通り過ぎて新たに薔薇を踏み潰しながら、彼女の指輪が良く見える所まで移動する。左の人差し指と中指に似たような赤い指輪が嵌められている。

「左がドラゴン・ブラッドね。右のはただのビジョン・ブラッド——ルビーよ」

どちらも血のようにしか見えないが、ルビーの方は光の加減で色が透き通っているように見えた。この空の赤さも彼女が原因だとしたら、どうしてこんなにまで赤に執着するのか。

「赤という色は原初の色。人間の血肉を彩る赤は狂気を催す。こんなに綺麗な色なのに貴方は吐き気を堪えている。なんて滑稽なのかしらね」

彼女の透き通る美しい声は彼の心まで遮蔽物に阻まれる事無く響く。根幹を揺さぶるその声が発せられる度に、彼は青白くなっていく。そして彼の疑問も同じく彼女には筒抜けだった。つまりこの場を阻む者はいないという絶望でもあったのだ。

「昔々、私はこの血の色に疑問を持っていて、そして意味を求めた。酸素を運ぶ為だけに

赤くする必要は本当にあったのか？　ヘモグロビン以外の意味があってもいいじゃないか。だって、こんなにまで貴方を狂おしくしてしまっているのだから」

心の問いに答える彼女の声こそが最も狂おしいのではないかと感じた。即ち、

「ではこの狂気に慣れてしまったら、一体何に夢を見ればいいのでしょうかね？」

彼女自身が狂気と言っても差し支えないのだから。

「たとえばこのペンダント、中には辰砂しんしゃが入っているの。辰砂は賢者の石とも呼ばれていて、数多くの人間がこの石に夢を見ていたのよ、笑えるわよね。……さて、ここからが本題。魅力的な貴方に絶望の問いをプレゼント」

臓腑はとうの昔にかき乱されており、傷つくのも厭わずに薔薇の絨毯に崩れ落ちる。饅えた臭いと薔薇の匂いが混じり、常に嗚咽を強要されている。喘ぐ彼の声に笑みを浮かべて、彼女は彼の根幹に問う。

「貴方は夢を持って生きたのかしら？」

果たしてこれが絶望の問いだったのだろうか。彼は理解できなかった。分かっている彼の顔を見て慈母の如く優しい頬笑みを浮かべる彼女だが、彼からしてみればより一層狂ったように思えた。

「貴方には夢がなかった。家族を亡くし、周りに同情されるのが嫌で頑張ってきたけれど、有名な国立大学に入学した事で世間的には認められたと感じてしまった。——貴方の人生はその時点でもう終わったのね。夢を持たずにただ進んできただけ」

理解が追いつきはじめる。捨ててきたはずの人生に追いつかれ、身体中に纏わりついてくる。一方で、彼の人生を全て見てきたような彼女の口振りよりも、国立大学というこの場に一切馴染まない言葉が出てきた事に疑問を覚えるほど彼自身も狂っていた。

「夢を目標にしてはならない。それは手段でなければならぬ。夢を国立大学に入学する事だったと仮定しても、国立大学に入って何がしたかったのかなんて持っていない」

慈母の微笑みが愉悦に支配されていく。その姿こそがこの赤い世界にふさわしい独裁者であろう。そして独裁者から理由が説明される。

「それでも貴方は空に憧れを抱いた。そして落ちながら貴方は最期に夢を見た。人が往来する日常に、赤い花の大輪を描きたかったと。脳漿を路上にぶちまけて染め上げ、人間らしからぬ曲げ方で輪郭を描く。それも人々の反応ではなく、貴方の身体がどう描かれるかに夢を見たのでしょうか？　傑作、素晴らしいわ！　だから私は貴方を此处に呼んだのよ」

彼は彼女に言われるまで自身の夢を理解していなかった。しかし一度認識したらもう元には戻れない。蒼白だった彼の顔が絶望に染まっていく。嗚咽から慟哭へと変わった彼の頬にひんやりとした手が触れた。

「死ぬ間際にようやく手に入れた夢、それを妨害してあげたのよ。もっと良い顔で嘆いて」空虚だと勝手に感じて、最後に残っていた小さな夢。それさえも奪われて本当に空虚になっちゃった彼。

空虚になっているはずなのに、彼はどうして嘆いているのだろうか。

彼の渦巻く全ての因果が彼女にこの上ない恍惚をもたらしていた。それは栄養を与えれば与えるほど味わる永久の果実。だから、

「何故貴方は最初の一步が館に向かっただったのか。何故貴方は血を舐めてしまったのか。何故貴方はこうして嘆く事ができるのか。それはね、人間は絶望を感じなくなるほどに夢を捨ててはいないから。この状態で嘆く事ができる貴方にとっては素敵で魅力的。是非成長して、私の狂気を手伝って頂戴！」

栄養を与えながら彼女は大きく笑う。薔薇や桜は風に揺れ、月や空は煌々と見下ろす。この世界全てが彼を閉じ込めるかのように赤に染まっている。彼の行方を知る者は彼女しかない。